

お方の話に其の病人なれば爪先まで眞黒な犬の生肝臓を黒焼にして飲したら平癒ると云ふので、夫れで立派な品物を持つて来て犬を連れて行かうとなさるのかと思ふ、何程不人情な者でも見殺しするのが厭ぢや、それぢやによつてお断り申すのぢや」

「イヤ、お話を承りまして御尤も、實は私の言葉が足りませなんだで、申し遅れまして相濟みませんことで、實は私は東區今橋の鴻池善右衛門から参りました者で、主人の宅に坊様（ばんち）がござります、寔に犬が好きでござりました處が、此程坊様が可愛がつてござる犬が病死をいたしました處から坊様が其の犬の爲に病氣で、ブラ／＼悪ふござりますので、主人が一方ならん心配をいたしました處から坊様入の者に似寄の犬を探して貰ひたいと近國近在を探して居りますが、一向に見當りません私が先日御當家の表を通り掛りますと寸分違はぬ、能う似た犬が居りますので、お願い致しましたら、早速遣らうと仰つしやつて下さりましたので、歸りまして主人に話を致しました處が、大きに嬉びまして、今日は日柄も宣しうござりますので、頂戴に参りました様なこと、御變改になりましたは、私が歸りまして、主人に申譯がござりません、言葉の行届きません處は幾重にもお詫をいたします、御氣嫌をお直し願ひます」

「アハ、左様か、イヤそれで話が悉（すべて）判りました、鴻池さんなら結構ぢや、貰はれる犬も仕合せぢや、私はお貰ひ申すものが餘り大仰ぢやに因つて疑惑（うたがひ）心を起しましたのぢや、サア、些とも早う連れて

お歸りなされ」

「有難う存じます、左様ならお詞の變りません内に頂いて歸ります、これ犬の箱を」

と申しますと、若い者が二人掛りで、唐木で造りまして、金の隅金物が打つてござります、中に敷いて有る蒲團が緞子で、其の箱の中へ犬を入れて遣りますと、今迄藁の上に居りましたのが、急にお蠶の上へ乗つたものなのですので心持が宜い。

「左様なら、チト彼方へお越の節はお立寄を」

「どうぞお歸りになりましたら、御主人に宜しう仰つしやつて下され、ハイさようなら」

鴻池へ連れて歸りましたが、今度此犬に病氣でも出たら、坊様の命に拘はると云ふので、鄭重に扱ひまして、毎日お醫者さんが來て、犬の診察を致します、食物も吟味を致しまして美味しい物を食べさせますので、體も太つて大きくなります、何處の犬と喧嘩をしても敗けた事がない、強い強うないのと云ふたら、大阪中の犬の大將になりました、大抵の喧嘩は此處へ連れて來ると治ります、これから犬の云ふてる事を翻譯致します。

「オイ、伏見町」

「ナンヤ、平野町」

「道修町の、此間の黒と白の一件は何うなつた」